

令和 2 年 7 月 4 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04475

研究課題名(和文)臨床教育学的アプローチによる若手教師の実践力形成過程に関する研究

研究課題名(英文)A Clinical-pedagogical Study on a Process for Becoming a Reflective Teacher

研究代表者

辻 敦子(TSUJI, Atsuko)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：30634232

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、若手教師がベテラン教師との対話において、持続的に自身の教育方法や教育観を練り上げるための協働実践研究グループ「たねの会」を研究フィールドとして、若手教師のナラティブ資料を収集した。教師の実践力形成過程における「語りの変容」を4年間にわたって継続的に検討することができた。収集したナラティブ資料に基づいて、若手教師の課題意識の変化を分析するとともに、研究フィールドの変容と継続に関わる要件についても検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「教育問題」とは、制度的な教育言説、目の前にいる子どもの言葉、管理職や同僚との関係、そして、保護者からの視線といった、複層的な要因が、教師において、いかに関連付けられ、言葉にされるかという、「教育を語る言葉」において日々生起する出来事であることが確認された。「たねの会」の参加者からは、「慣れ」への不安や、教師という職業が社会と断絶しているのではないかという焦りが語られた。彼らの語りから、教師を続けることを前提とした教師教育や研修方法自体が、若手教師の焦燥感を高めている可能性があるという示唆を得た。教員養成、および、教師教育には、教師のあり方が多元化・多様化しうる「余白」が求められる。

研究成果の概要(英文)：In this research, we examined young teacher's anxiety, impatience, and stumbling that occur in the process of teachers making their own teaching methods and educational views, in order to think about a new teacher education. The clues are the narrative materials collected at the "Tane no Kai" (Tane means kernel and Kai means meeting), a collaborative research group consisting of young teachers, experienced teacher, and researchers. The transformation of teacher's narrative shows us a narrow part of the process of becoming a reflective teacher.

研究分野：臨床教育学

キーワード：臨床教育学 物語(ナラティブ) 教師の資質形成過程 省察 意味生成

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

若手教師が直面する問題の一つは、「明日の授業をどうするのか」ということである。日常業務に追われる中、いわゆる「ハウツー本」にあたり、研修会に出かけたりしながら、自分なりの授業スタイルを作ろうと取り組んでいる。この場合、彼/彼女が「お手本」とするのは、経験を積んだベテラン教師たちが示す実践案や授業方法であることが多いだろう。しかし、ベテラン教師が長い歳月をかけて構築してきた方法論は、時として当人へのみ実践可能な「名人芸」になってしまうことがある。若手教師がこの名人芸を真似ようとしても、多くの場合うまくいかない。それは、教育実践を取り巻く時代状況のみならず、目の前にいる子ども自体もその都度異なるためだ。また、授業方法と子どもとの関わり方や子ども理解は切り離せるものではない。そして、教師自身も刻々と変化しつつある存在である。そのため、教師の実践を考える際には、「ここいま」に立つ臨床的視点が不可欠である。パッケージ化された「よい実践」から「よい教師」の資質を抽出するレトロスペクティブな視点ではなく、教師としての人間形成過程にある若手教師が、教育実践における、自らのとまどい、焦り、逡巡をめぐって語り出すナラティブへ臨床教育学的にアプローチすることで、望ましい教師の資質を問い直す、プロスペクティブな視点に立つ教師教育研究が必要である。

2. 研究の目的

若手教師が、教育的日常に押し潰されることなく、持続的に自身の教育方法や教育観を練り上げていくことを支援するために、主体的に学び続ける教師の実践力を養成する教師教育、および、教員養成課程を臨床教育学的に探究する。具体的には、キャリア10年未満の若手教師が語る教育実践についてのナラティブを主たる考察対象として、研究者と現職教師の協働的な関係において、教師としての自己を対象化することで教師として生きることに支える力となる「省察」を質的に向上させるための教育的支援を行い、未知の教育問題に対応する実践力が培われていく、教師としての不可視的資質形成過程を解明し、その教師の資質形成過程を捉える臨床教育学的アプローチに基づいた教員養成課程の構築に取り組む。

3. 研究の方法

(1) 研究協力者である若手教師を中心に、ベテラン教師も含めた協働実践研究グループを形成し、若手教師のナラティブを収集・共有するとともに、臨床教育学的アプローチによってその分析を行う。また、随時、若手教師との関わりにおいて研究の輪を広げていく。
(2) 年度ごとに臨床教育学やナラティブに関わる研究者を招いた研究会を開催し、若手教師のナラティブを主要テキストとして、集中的に討議を行う。
(3) 上記の検討を踏まえて、教師の不可視的資質形成を解明するとともに、その過程を支える臨床教育学的アプローチ、および、それを基にした教師教育をテーマとする論文を執筆し、研究報告書を刊行するとともに、日本教育学会と教育哲学会でラウンドテーブルを企画し、広く研究成果を発信する。

4. 研究成果

本研究は、若手教師が持続的に自身の教育方法や教育観を練り上げるための協働実践研究グループ「たねの会」を研究フィールドとして、若手教師のナラティブ資料を収集した。収集したナラティブ資料に基づいて、若手教師の課題意識の変化を分析するとともに、研究フィールドの変容と継続に関わる要件についても検討した。補助事業期間の延長が認められたことにより、教師の実践力形成過程における「語りの変容」を4年間にわたって継続的に検討することができた。

(1) 現職教師と研究者による協働実践研究の遂行：キャリア10年未満の若手教師とベテラン教師をメンバーとする協働研究フィールド「たねの会」を年に2回の頻度で開催し、若手教師のナラティブ資料収集を積み重ねた。ただ、最終年度はコロナ禍にあって、3月末に予定した会を無期延期せざるを得なかった（「たねの会」は補助事業期間終了後も継続する予定である）。「たねの会」は当初、奈良女子大学出身の若手教師を中心にスタートしたが、その後、大阪市の若手教師や、特別支援学校の教師も合流することとなった。後にも述べるように、教師とは別の人生の選択肢を選ぶ参加者もあったが、彼/彼女にも退職者としての視点から会への参加を継続してもらっている。ここには、いわゆる「教師文化」における定型的な教育の語りを超えていく契機が秘められていると考える。

(2) 若手教師のナラティブ資料の分析：若手教師のナラティブ資料をテキストとして、臨床教育学的アプローチによる分析を行った（未刊行）。資料の蓄積方法は、対話の録音を文字起こしする形をとった。「言葉と子ども」を「たねの会」の基本テーマとして、授業時に子どもたちから発せられる「気になる言葉」を持ち寄り、参加者間でのやり取りにおいて、子どもの言葉の意味を紡ぐことを試みた。また、教育実践における各自のとまどい、

焦り、逡巡を共有する中で、参加者の学校における役割変化が生じる（若手から中堅の入口へ）ことで、教師として生きるうえでの「選択肢」も複数化することがあらためて明らかとなった。それは、何に自分の「専門性」（教科教育、道徳教育、生活指導など）を求めていくのかという、教師としての役割意識の多様化とも捉えることができる。他方、いかに「よい」教育実践を行っていたとしても、退職を選ぶ者もいるため、「退職という語り」を検討することが今後の課題として残された。

(3) ゲスト研究者を招いての討議：「たねの会」に、元奈良女子大学附属小学校副校長である梶田萬理子氏を招き、「言葉と子ども」という観点から若手教師の直面している問題を共に考察した。授業での子どもの言葉を取り上げるところから、それぞれの参加者の子ども理解のありようを垣間見ることができ、かつ、それがどのように変化していくのかを追うことができた。「ベテラン教師」である梶田氏の問いかけが、参加者があらためて自身の子ども観を言語化し、それを反省的に捉える契機となった。また、梶田氏自身も、自らの長い教師生活における経験を語る言葉に工夫を重ね、会を重ねるごとに新たな語り方へと変化していることも明らかとなった。この意味で、当初想定していたベテラン教師の「名人芸」としての教育方法（授業実践）という見立てには変更が迫られることとなった。なぜなら、ベテラン教師であっても、語りかける相手によって、伝え方が異なるためだ。参加者からは、「慣れ」への不安や、教師という職業が社会と断絶しているのではないかという焦りが語られた。彼らの語りから、教師を続けることを前提とした「会の応答の枠組み」自体が、若手教師の焦燥感を高めている可能性があるという示唆を得た。教員養成、および、教師教育には、教師のあり方が多元化・多様化する「余白」が求められる。

「教育問題」とは、制度的な教育言説、目の前にいる子どもの言葉、管理職や同僚との関係、そして、保護者からの視線といった、複層的な要因が、教師において、いかに関連付けられ、言葉にされるかという、「教育を語る言葉」において日々生起する出来事であることが確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----